論　文　ニダバ (*Nidaba*) 34(2005), 87-95

アルバニア語における「不変化詞＋接続法」の機能的特徴

井　浦　伊知郎

0. 序

「ニダバ」32号に掲載された拙稿「アルバニア語における『不変化詞＋接続法』の機能的特徴について」では、アルバニア語の接続法[1]動詞が様々な不変化詞と組み合わせて用いられる例を現代のテクストから取り出して分類し、その意味機能について概観した。

アルバニア語の接続法は未完了形で非現実話法や条件法として用いられるなど、他の印欧語の接続法とも同様の役割を持つ。

(1) Sikur <u>të kisha</u> të holla, do <u>të udhëtoja</u>.
as if have-subj.impf.sg.1 money will travel-subj.impf.sg.1
「もしお金を持っていたら旅行するだろうなあ」

それだけでなく西欧語の不定詞構文に相当するものの多くが、アルバニア語の場合には主として動詞の接続法で代用される。これはアルバニア語に限ったことではない。現代のバルカン諸語の動詞には不定詞がない（あっても用いられることが少ない）からである。「(私に、私が) 飲むものをください」に相当するバルカン諸語の例を示す。

(2) (アルバニア語) Jepmë <u>të pi</u>. [2]
give-imp.+me　drink-subj.sg.1

(3) (ルーマニア語) Dă-mi <u>să beau</u>.[3]
give-imp. me　drink-subj.sg.1

(4) (ブルガリア語) Дай ми <u>да пия</u>.[4]　[daj mi <u>da pija</u>]
give-imp. me　drink-subj.sg.1

(5) (マケドニア語) Дај ми <u>да пие</u>. [4]　[daj mi <u>da pie</u>]
give-imp. me　drink-subj.sg.1

(6) (ギリシア語)　Δος μου <u>να πίω</u>.[5]　[dos mu <u>na pío</u>]
give-imp. me　drink-subj.sg.1

アルバニア語の接続法は、「可能」「許可」「義務」「意志」「単純未来」などをあら

わす（動詞由来の）不変化詞と共に用いられるが、これは他の多くの印欧語ではむしろ動詞の不定詞と共に用いられるものである。本来の不定詞が消失した（Joseph 1983）ため、これに代わるものとして用いられている面が大きいと言ってもいいだろう。従ってアルバニア語では、他の印欧語の場合に比べて接続法の役割の範囲が広いことになり、それが具体的にどのようなものであるかが問題になってくる。

本稿では、接続法と共に用いられる動詞由来の不変化詞[6]のうち、特に用例の意味範囲が広い「do＋接続法」を中心として、「duhet＋接続法」など他の形式と比較しながらその意味機能を更に詳しく分析したい。

1. バルカン諸語における「不変化詞＋接続法」とアルバニア語の「do＋接続法」

doは、一般動詞のdua「欲する」に由来する不変化詞である。「do＋接続法現在」は「単純未来（simple future）」や「意志（volitive）」の意味で用いられる。

「欲する」動詞が未来の助動詞「～だろう、～しよう」として機能することも、実はバルカン諸語に共通の現象である。「私は本を買おう，買うつもりだ」に相当する文例を各言語について示す。

(7)（アルバニア語）do të blej një libër　　(do < dua)
will buy-subj.sg.1 a book-sg.acc.

(8)（ルーマニア語）o să cumpăr o carte[7]　　(o < voi)
will buy-subj.sg.1 a book

(9)（ブルガリア語）ще купям една книга[8]　　[ʃ te kupjam edna kniga]　(ще < ща)
will buy-subj.sg.1 a book

(10)（マケドニア語）ќе купам една книга[8]　　[tʃ 'e kupam edna kniga]　(ќе < ќа)
will buy-subj.sg.1 a book

(11)（ギリシア語）θα αγοράζω ένα βιβλίο　　[tha agorázo éna vivlío]　(θα < θέλω να)
will buy-subj.sg.1 a book

それでは、アルバニア語の「do＋不変化詞」についてもう少し詳しく見てみよう。次にあげる例では、文例(12)の後半と文例(13)の前半後半それぞれにこの形式が見られる。

(12) Kur të kthehet do t'i flas.
when return-med.sg.3 will 3.sg.dat talk-subj.sg.1
「［彼女が］戻って来たら、話をしよう／することになるだろう」

(13) Ku do të vini? Do të dalim një here.
where will proceed-subj.pl.2 will go out-subj.pl.1 one time
「君たちどこへ行くつもりだ？」「我々はちょっと外へ出てみるよ」

条件節と組み合わせた例(12)は文脈によって「単純未来」ととれる場合もあるが、例(13)は明らかに「意志」の例である。これに近いものとしてkam＋二次的不定詞（për të＋分詞）から成る場合があるが、これは「単純未来」などというよりはむしろ「必然（necessity）」の意味を持ち、英語の「have to＋不定詞」あるいは「be to＋不定詞」に近いと言えよう。

(14) Më ka akoma për të dhënë njëzet e shtatë napolona.

1.sg.dat. have-sg.2 more give-part. twenty and seven napoleons

「彼は私にもう27ナポレオン［金貨］を渡すことになっている」

上にあげた「do＋接続法」の用法がどの程度の広がりを持つか、次節以下で、接続法を含む他の形式と対比してみたい。

2.「duhet＋接続法」および「do／duhet＋分詞」との対比

duhetは前節で挙げたduaの中・受動形が固定されたもので、通常不変化詞である（ただし未完了形ではduhej、複数形ではduhenとなることがある）。「duhet＋接続法現在」は「義務（obligative）」や「必然」の意味で用いられる。

(15) Ti duhet ta kuptosh.

thou must 3.sg.acc. understand-subj.sg.2　「君はそれを理解しなければならない」

(16) Duhet ta ketë kuptuar

must 3.sg.acc. understand-subj.pf.sg.3　「彼はそれを理解したはずだ」

doとduhetは語源的には同じものだが、前節と本節で示した例では、接続法と共に用いられる場合の意味機能が明らかに異なっている。

一方、不変化詞doあるいはduhetに、接続法[9]でなく分詞を伴う例もあるが、いずれの場合もその意味は例外なく「義務」「必然」である。従ってこれは「duhet＋接続法」と意味機能において競合する可能性がある。文例を示す。

(17) Ara do korrur, gruri do shirë, lopa do mjelë, hajvanët duhen grazhduar.

field will mow-part. grain will thresh-part. cow will milk-part. domestic-pl. must feed-part.

「畑は収穫され、穀物は脱穀され、牛は乳を絞られ、家畜達は餌を与えられていなければならない［頃合だ］」

(18) Duhen marrë masa të rrepta nga qeveria.

must take-part. measure severe by government

「政府によって断固たる処置が取られるべきだ」

(19) Gjer në xhade duhej ecur një orë.

till to highway must go-part. one hour

「国道に出るまで一時間はかかるはずだ」

ところが、これら(17)から(19)の文例には一つの共通した特徴がある。実は、これらの文例の主語は3人称（または非人称構文）に限られているのである。また常に「受身」の表現であり、しかも主に話し言葉に見られる。従ってこれは話者による「必然性」の認識を示すものに限って用いられており、「duhet＋接続法」の用法とはほとんど競合していないと考えてよいだろう。

もっとも、次にあげる文例(20)のように、場合によっては話者自身が行為主ともとれるような例もあった。

(20) A duhet nisur tani?
(interrogative) must start-part. now
「（独言、或いは同行者に向かって）もう出発してもいい頃ではないか？」

もっともこの場合は、動詞がnis「発送する」の中・受動態に由来するnisem「出発する」であるためと考えられる。

次に、これらの機能上の差異を、疑問文についても見てみよう。次の文例(21)は肯定か否定かのいずれかで答えられ、文例(22)は何らかの補足語で解答することになる。また文例(23)は付加疑問でどちらにも属さないように見えるが、基本的に肯定の返答が必要とされる点からして、このグループに入れてもよいと思われる。

(21) Ti do të ikësh, apo do të presësh?
thou will go-subj.sg.2 or will wait-subj.sg.2
「君は行くつもりかい、それとも［ここで］待っているかい？」

(22) Shoku yt kur do të vijë?
comrade your when will come-subj.sg.2　「君の仲間はいつ来るのか？」

(23) Ti do të vish me mua, apo jo?
thou will come-subj.sg.2 with me or not　「君、僕と一緒に来るよね？」

一方、次の文例(24)のように、話者の中で意見は或る程度定まっているが、一定の疑念や躊躇、或いは抗議の意図などを含みつつ、疑問文として発話する場合にも「do＋接続法」が用いられる例が見られる。

(24) Do të kenë arritur? Me siguri.
will arrive-subj.pf.pl.3 with sureness　「あの人たち来た頃かなあ？」「決まっているさ」

次の文例は(20)と似た例であるが、主語の数・人称は明示されている。

(25) Po unë kur duhet të nisem?
then I when must start-subj.pl.1
「で私はいつ出発すべきなのか？（純粋な疑問）」

(26) Unë do të të mësoj tërë jetën? Turp të kesh!

I will 2.sg.dat. teach-subj.sg.1 whole life shame have-subj.sg.2

「私は君に一生教え続けるのかい？恥を知りたまえ！（忍耐の限界）」

(27) Ti do të më qëllosh mua?!

thou will 1.sg.acc. shoot 1.sg.acc. 「おまえ、俺を撃つつもりか?!（撃たれる直前）」

さらに、1人称を主語とした場合の内省的な問いかけ、「思案法（deliberative）」と言えるような例もある。

(28) Po bojën ku do ta marr?

then color where will 3.sg.acc.+take-subj.sg.1

「（絵の具を選びながら独言）さてどの色にしようかな？」

3. 「mund＋接続法」との対比

この場合は、主観的、または客観的な「可能性（possibility）」「許可・容認（permissive）」を示すものが大半である。

(29) Jo, nuk mund të ishte ai!

no not can be-subj.impf.sg.3 he

「いや、彼であるはずがない！」（可能性・蓋然性）

(30) Unë mund të zë dhe pesëdhjetë në ditë... me leq i zë shumë kollaj.

I can catch-subj.sg.1 also fifty in day with snare 3.pl.acc. catch-sg.1 more easily

「一日50匹も［魚が］取れるよ･･･罠を使えばもっと楽さ」（可能性・能力）

(31) Ju të tjerët mund të shkoni.

you the others may go-subj.pl.2

「他の人たちも行ってよろしい」（許可・容認）

ただ、上にあげた以外の用法となると現時点では、前節の「do／duhet＋接続法」や次節で述べる「le＋接続法」ほど広がりはなく、これらとの意味機能の重複は見られない。

4. 「le＋接続法」との対比

この用法は一般的に、話者も含む行為の当事者（1人称複数）に誘いかける「提案・勧誘」の表現で用いられる。次にあげる例のうち、最初の文例(32)がこれにあたる。

(32) Le të mos flasim më mirë për këtë gjë...

let not talk-subj.pl.1 better about this thing

「（我々は）そのことはなるべく話さないようにしよう･･･」（提案）

しかしながら実際の文例を見る限りではより幅広く、前節で示した「許可（permission）」や「命令（jussive）」の意味を示すこともある。

(33) Fjonggoja ra në vatër... Le të digjet.

ribbon fall-aor.sg.3 into hearth let burn-pas.subj.sg.3

「リボンが炉の中に落ちた･･･［いいから］燃やしてしまえ」（許可・容認）

(34) Më mirë le ta vendosë këshilli.

better let set-subj.sg.3 council　「会議を開いた方がいいだろう」（提案）

(35) Ata që shkojnë për në front të mos presin... le të luftojnë një herë...

those which go-pl.3 to front not wait-subj.pl.3 let fight-subj.pl.3 a time

「前線に赴く者は［指示を］待つべからず･･･まず戦え･･･」（明らかな命令）

文例(33)から(35)までを見ると、命令の強さには差がある。明確な「命令」は(35)だけであり、(33)や(34)はそれぞれ「～してもよい」「～した方がいい」という意味にも取れる。しかしこれらは単に聞き手の自由な判断に任せるという、純粋な意味での「容認」「提案」ではない。むしろ、言外に話し手の強い希望を含んでおり、自然な会話の流れにおいては「命令」や「指示」の発話機能を持っていると考えられるのである。

また次にあげる例(36)の前半部分のように、1人称の文では、ちょうど日本語の「我をして～しむ」のような表現として、doを用いた場合に近い「意志（volitive）」の機能を持つ例も見られる（ちなみに後半部分は『単純未来』である）。

(36) Por le të them se do të bëhet.

but let say-subj.sg.1 that will make-med.subj.sg.3

「しかし（私は君に）言っておくが、［事態は］そうなるだろう」（意志）

しかし、こうした傾向は既に述べた「do＋接続法」でも見られる。次の例は明らかに、聞き手に対する「命令」である。

(37) Do të vesh pa tjetër, se ka ardhur urdhër i posaçëm.

will go-subj.sg.2 of course as come-pf.sg.3 order special

「もちろん君は行くのだ、特別な命令が出ているからな」（命令）

以上で述べたように、leも不変化詞本来の意味機能（『～のままにしておく』『～させておく』）より幅広く用いられており、実際の文例の持つ意味は不変化詞ごとの単純な分類に必ずしも従わない。しかも「命令」の発話機能を持つ場合においては「do＋接続法」と「le＋接続法」はほとんど区別なしに用いられており、上の文例を見る限りでは、意味機能が一部重複しているように見えるのである。

5.結論

本稿ではアルバニア語における接続法の機能がどの程度の広がりを持つのかについて、「do＋接続法」を中心に例をあげて示した。また、接続法の例と競合しているように見える他の文例（例(17)～(20)）についても、その意味上の差異を考察した。

本来の意味での不定詞がないことから、西欧語であれば不定詞句や命令法、或いは希求法などで表現し得るような発話まで、アルバニア語では接続法（時に『二次的不定詞』[10]）が用いられるが、この接続法は単独でなく、動詞由来の不変化詞と共に用いられて「意志」「義務」「可能」など様々な法叙性を持つ。この中でも「do＋接続法」は特に広く用いられているように見えるが、それはdo本来の動詞から推測される「意志」や「単純未来」に限定されるものではなく、本稿で文例を考察したように、「duhet＋分詞」における「義務」や「必然」、あるいは「le＋接続法」であらわされる「提案」や「命令」の用法と発話機能において重なる部分も見られる。この点、英語におけるwillなどの用法よりも不変化詞doの意味範囲は広いように見える。一方で「le＋接続法」の形式が「do＋接続法」とほとんど同じ意味を示す場合（例(36)など）もあり、両者の意味機能は「意志」「命令」などの用法において重なりを示している可能性が考えられる。

もっとも本文の分類には含まれなかった他の例[11]も存在するが、これについては文例自体が例外的に少ないので、本稿では考察の対象外とした。今後は、これらの例も併せて、「do＋接続法」における意味機能の拡張や他形式との競合について、通時的にも分析する必要があるだろう。

なおアルバニア語では、代名詞の重叙表現の適用範囲が歴史的に拡張していることが既に知られているが、同じような傾向はマケドニア語やルーマニア語など周辺言語にも存在するように見える（文例(2)～(11)　不定詞が用いられない点も共通）。接続法の機能についてもこれらの言語はアルバニア語と共通の傾向を持つ可能性があり（Mansaku 1994）、この点を対照すれば、バルカン諸語の動詞機能について一つの見取図ができるように思われる。

註

1) アルバニア語の動詞の法（mood）には直説法（indicative），接続法（subjunctive），希求法（optative　願望法とも），命令法（imperative），感嘆法（admirative）がある。接続法は常に小辞tëと共に用いられるが、これはアルバニア語最古の文献（1555年）中に既に確認されており、文献時代以前からアルバニア語において「小辞＋動詞屈折形」からなる接続法が存在したことは明らかである。

ただし、幾つかの歴史言語学的研究を見る限り、その機能は今日のそれとは一致しない。小辞tëを伴わない接続法の例（形態的に直接法と判別できる場合に限る）が中古期の文献に

存在し、接続法の用例も元来は従属節内に集中していたからである。しかし時代が進むに従って「të＋接続法」の形態が安定し、使用範囲も拡張され、今日では主節あるいは単文内での用例も当たり前のものとなっている。以上の点も踏まえ、本稿では特にことわらない限り「të＋接続法」をアルバニア語の「接続法」として話を進める。

2) 実際の会話では融合形で Amë të pi.となることが普通だが、動詞＋人称代名詞弱形の形態を判別し易くするため、本文のように書き換えている。

3) ルーマニア語には不定詞 a bea があるが、上のような例では接続法を用いる。

4) 他のスラヴ語には不定詞がある。ロシア語では пить（1 人称単数直説法現在 пью)、セルビア語では piti（1 人称単数直説法現在 pijem)。

5) 古典ギリシア語には不定詞があるが、現代ギリシア語では消失している。

6) 本稿で取り上げる動詞由来の不変化詞には次のようなものが含まれる；

do（意志・未来　英willまたはwant）　duhet（義務・必然　英mustまたはshould）

mund（許可・可能　英canまたはmay）　le（許可・勧誘　英letまたはshall）

なお、これらに加えて接続詞qëもよく用いられるが、[që] të＋接続詞「～するため」でしばしば省略され、統語的・意味的相違が特に見られない。

7) 他のロマンス語には動詞の未来形人称変化がある。例えばイタリア語における comprerò un libro など。

8) 他のスラヴ語では「be 動詞の未来形＋不定詞」に相当する構文となる。ロシア語の例を示す。

буду покупть одну книгу

will buy-inf. a book-sg.acc.

これは（ブルガリア語やマケドニア語と同じ）南西スラヴ語に属するセルビア語でも同様である。ただしこの場合の ću は hoću「欲する」に由来する。

ću kupiti jednu knjigu

will buy-inf. a book-sg.acc.

9) 「do＋分詞」の他、小辞 të を伴わない「do＋接続法」は、主に「意志」の用法で見られる（しかも他のバルカン諸言語にも同様の傾向が見られる）という指摘が少なくないが、話し言葉では「単純未来」の意味にしか取れない例でもしばしば見受けられるので、ここでは前節の「do＋接続法」の場合に含む。なおアルバニア語に現在分詞と過去分詞の区別はない。

10) 話題を標準語に限定しなければ、「不変化詞＋分詞」から成る「二次的不定詞」も広範囲に用いられている（Veselaj 2000, 井浦 2003）のだが、その機能の大半は本稿で述べた「不変化詞＋接続法」でまかなわれる形になっている。実際、もし「二次的不定詞」が発達していなければ、アルバニア語古来の不定詞が担い得る機能の全てが接続法にとって替わられていたのではないかとする見解（Demiraj 1993）もあり、アルバニア語の接続法が

その機能を拡張させ、不定詞の担うべき役割にまで浸食してきた可能性を示している。

11) 本文であげた文例の他に、「不変化詞＋接続法」の例で上の分類に入らなかったものをここにあげておこう。

Pa të bëjmë pak hesap!

do-subj.pl.1 a little bit count

「［いろいろ言う前に］まあ、とりあえず勘定してみることだ」

この例は実質的に命令文であり、請求書を持つ相手に対する遠回しな命令・要求を、不変化詞pa＋接続法1人称複数で表現している。paは本来「～なしで」という意味で、否定文に用いられるのだが、この場合は明らかに「やるしかない」「やってみろ」と要求しており、接続法の「命令法」としての機能を補完する小辞として用いられている。次の例も、接続法でなく「kam＋二次的不定詞」によるものだが、命令法や希求法を用いずに「命令」を意図していると考えられる。このような例は ── 当然のことだが ── 2人称を動作主とする例でしか見つからない。

Ke për të vdekur!

have-sg.2 for die-part.　「死ね！（汝死すべし）」（命令法Vdik!　希求法Vdeksh!）

参考文献

Camaj, Martin (1984). *Albanian grammar.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Domi, Mahir (red.) (1995). *Gramatika e gjuhës shqipe I. Morfologjia.* Tiranë: Akademia e shkencave e RSH.

Domi, Mahir (red.) (1997). *Gramatika e gjuhës shqipe II. Sintaksa.* Tiranë: Akademia e shkencave e RSH.

Fiedler,Wilfried & Buchholz, Oda (1987). *Albanische Grammatik.* Leipzig: Verlag Enzyklopädie.

Joseph, Brian D. (1983). *The synchrony and diachrony of the Balkan infinitive.* Cambridge, Cambridge Univ.Press.

Mansaku, Seit (1994). Problems of the typology of the Albanian language in the context of the Balkan languages. *Studia Albanica*, 31/1-2, 75-85.

Veselaj, Nuhi (2000), *Paskajorja. Çështjë e shqipes standarde.* Prishtinë: Dardania Sacra Shtufi.

井浦伊知郎（2003）「アルバニア語北部方言の不定詞に見られる形態および機能面の特徴」　『ニダバ』32号，76 - 84